

花のひらくように

ついこのあいだ、四国の宇和島に住んでいる古い友人から、『梨花』と題する詩集をおくってきた。この本の終わりに、同じ著者の既刊の詩集の目録がかかっている。数えてみると全部で九冊ある。こんど出たものを合わせると、十冊ということになる。戦後十年あまりのあいだに十冊もの詩集を出したとは、おどろくべきことである。しかも既刊詩集のすべてが点訳されており、そのなかの一冊は英訳もされていることを、この目録ではじめて知った。

友人は、戦争が終わってまもないころ、『ペルソナ』という謄写刷のうすい詩誌を出しはじめた。年に四回ぐらいだったと思うが、出るたびに惠贈をうけた。外界も内界もひとしく空漠として、生きること自体が妙にうっとうしく思われたあのころに、この片々たる冊子が、どんなに勇氣を与えてくれたことか。たとえば、編集後記のわずか数行の短文からも、生のあかしを読みとった喜びは、今も忘れることができない。

こんどもらった詩集の見開きの両面にかけて、こんなことばが、墨痕あざやかに書きつけてあった。

花が

ひらくように

心の扉を

ひらく

思えば、『ベルソナ』を出しはじめたころの詩人の悲願が、まさにこれだったのだ。そしてこの悲願が、つぎつぎと開花して、十冊の詩集となったのだ。

ちかく、近代文学研究会から、雑誌を出すことになったというので、編集者は私に一文を求めてきた。あらためていうほどのこともない。おたがいに、心の扉をひらいて、創作であれ、評論であれ、随想であれ、思うことをつつまず述べあうがよい。ちょうど開花が、いのちのおのずからなる発動の姿であるように！

(昭和三十五年八月)